

# 学ぶ幸せ 未来への一歩

## 買われる子どもたち

4

ミター(21)は昨年5月、大学生になった。「花売りだった私が、大学生としていられるのは自分でも信じられない」

タイ北部のNGO「アサー・パッターナー・デック財団」が15年前から支援するストリートチルドレンの中で初めての大学生だ。

ミャンマー出身のアカ族。父母が離婚し、母は1歳のときに死亡。おばに連れられてチェンマイに来て、幼いときから盲目のおじの手を引き、物乞いをした。夜は遅くまでバーの近くで花を売った。

財団との出会いは7歳。

スタッフが広場でゴザを敷いて活動をしていた。ビデオを見たり、本を読んだり、お菓子を食べたり。知っている手に誘われて行ってみたら、タイ語はわからなかったが、楽しかった。

そこで読み書きや、物乞いは恥ずかしいことだと教わった。おばには「そんな暇があるなら、物乞いをし

ろ」と怒られたが、通い続けた。

「学校に行かないか」と勧められ、9歳でメーホンスンの全寮制の学校へ。中学、高校と進み、大学では社会開発を学ぶ。学費は財団を通して日本の寄付者か

らの奨学金でまかなう。大学が休みのときは財団の活動に参加する。メーサイの町に出かけ、物乞いを



裸足で歩き回るストリートチルドレンたちの足の傷の手当てをするミター。サンダルを渡しても物乞いには不都合と、すぐにどこかに捨ててしまう「タイ・メーサイ



しているアカ族の子どもたちの手足の傷を消毒したり、お菓子を渡したりしながら、「勉強してみたくない？」と声をかける。

だいたい「イヤ」という返事だが、「彼らには時間が必要。勉強すれば物乞いしなくてもいい、勉強は楽しい、ということを伝えていきたい」。

さらにミターは言う。「ほかの人のためになれる機会があることはとても幸せ。将来はソーシャルワーカーになって財団の手伝いをしたい」。彼女の存在は、路上で暮らす子どもひとつのモデルだ。

国境近くの山村に生まれたアカ族のミトウ(41)は、10歳で父母を結核で亡くした。学校に行ったこと

はなく、食堂の仕事があると誘われ、2人の弟を養うために町に出た。そこで売春を強制された。

15歳のとき売春宿が摘発され、助け出された。山岳民族の少女たちのための民間の保護施設「ニュー・ライフ・セクター」で2年間暮らした。学校に通いながら裁縫とミシンを習った。

その後、縫製工場で働き、オーダーで仕事を請け負って腕を上げ、約2年前にチェンマイのナイトバザールで店を持った。手作りのカバンや小物などを売る。結婚して、16歳と18歳の子の母親でもある。

「ニュー・ライフ・セクターは新たな人生を与えてくれた。かつての私のように機会に恵まれない子どもたちに力を貸してほしい」地道な支援活動が少しずつ実を結びつつある。

―敬称略、おわり  
(文と写真 編集委員・大久保真紀)